2000年　卒業研究要旨

同性愛嫌悪に関する一考察

田形　淳　　(7071-1052)
指導教官　：　笹原　恵

研究の背景

社会には目に見える，見えないにかかわらず，様々な差別がある．女性差別・障害者差別・部落差別・外国人差別・学歴差別など挙げていけばきりがない．しかし，これらの差別は近年徐々に解消されつつある．しかし，セクシュアル・マイノリティ，特に同性愛者に対する差別はいまだに根強い．少なくとも，私は高校までの学校教育で同性愛について触れた授業は受けた記憶がない．また，テレビのバラエティー番組では，男性同性愛者を笑いものにするようなコントが放送されているし，日々の生活においても「男性が女性的な言動」をしたり，「男性が女性的な行動をとったり」すると，「ホモっぽい」と言って笑いものにする場面を見かけることがある．しかし，それについて不快に感じたり，疑問を感じる人はほとんどいないように思う．私が，なぜ同性愛者がこんなにも嘲笑の対象にされなければならないのか，という疑問を抱いたことが今回の論文を書くきっかけとなった．

研究目的

多様な性のありかたを解き明かすことによって，同性愛が多様な性のありかたのひとつであることを示す．その上で同性愛者がどのような存在であり，社会的にどのような位置付けにあるのかを示す．また，同性愛嫌悪という形で同性愛者が差別を受けている現状は「男らしさ」「女らしさ」の規範にとらわれていることが原因であると考え，「男らしさ」「女らしさ」がどのように形成されるかを探り，その上で，同性愛嫌悪の源が何であるかを明らかにすることを研究目的とする．

研究方法

『同性愛に関する学生意識調査』の実施　→静岡大学大谷・城北各キャンパスの学生が対象
『同性愛者の現状実態調査』の実施　→当事者である同性愛者が対象

『同性愛に関する学生意識調査』はexcelで集計し，分析を行った．『同性愛者の現状実態調査』は票数が極めて少ないため，ケーススタディと言う形で本文中に織り込んだ．同性愛嫌悪とジェンダーの関係，マスコミの関係，同性愛者の不可視性という観点から同性愛嫌悪の源を

明らかにする．

研究結果

①ジェンダーとの関係について

「男性が女性的な行動をとる」ということに対して嫌悪感を示す人は，同性愛者に対して厳しい対応をとる，または偏見を抱いていることが多いようである．また，女性よりも男性のほうがその傾向は強いようだ．

②マスコミとの関係について

マスコミとの関係という観点では，それほどはっきりした傾向は現れなかった．おそらく，「マスコミで扱われている同性愛者と自分とは無関係だ」という意識が強いためであると思われる．

③同性愛者の不可視性との関係について

同性愛者の知り合いがいる人で，同性愛者について偏見を持つ，あるいは厳しい対応をとる傾向のある人はほとんど見られなかった．やはり「知り合いがいる」ということで，ステレオタイプに基づいた偏見から抜け出すことができたのではないかと思われる．

まとめ

今回の調査結果からは，特にジェンダー教育についての重要性ということが言えそうだ．既存の「男らしさ」，「女らしさ」の価値観からの脱却こそが，性に関する差別を解消する第一歩になるだろう．それを学ぶためにも，まさに学校教育の重要性がよりクローズアップされるべきであると考える．

また，今回の調査では，同性愛についての情報は学校教育で与えられることがほとんど無い，という結果が出ただけに，性教育や普段の学校教育のなかで，同性愛についてもっと扱うことが重要になるのではないだろうか．それはまた，同時に同性愛者を可視的な存在にすることにもつながっていく．

同性愛嫌悪の解消には，様々な方面からの努力が必要になる．今後どうなっていくかを見守ると同時に，私たちもまた自分自身の中にある，同性愛に対する嫌悪感をなくして努力をしていくことが重要であろう．